
IS <インフィニット・ストラトス> ~pride of the sky~

あいうえお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス>のpride of the
e s k y

【Nコード】

N3518W

【作者名】

あいっえお

【あらすじ】

ある日リボンに呼び出されたツナと守護者たち。そしてツナたちは10年後に行く事になる。だが、その10年後は自分たちが知っている世界とは何もかもが違っていた。科学技術の促進、女尊男卑の社会、そして何より“IS”の存在。その世界でツナたちを待ち受けるものとは。ISと家庭教師ヒットマンREBORNのクロスオーバー

第1話 プロローグ(前書き)

皆さん初めまして！

これから頑張っていくと思います！

前書きがこれで良いのか…(……

第1話 プロローグ

ある日の並盛神社、そこにはある集団が集まっていた。

人数は8人。そのうちの一人、茶髪にツンツンヘアの気弱そうな少年“沢田綱吉”が口を開いた。

「一体なんなんだよりボーンの奴。守護者皆集めて…」

愚痴をこぼすツナに銀髪で傍から見たら不良のような風貌の少年“獄寺隼人”が言った。

「それにしてもリボンさん遅いですね…」

「ま、小僧なら心配ないだろ」

それに黒髪で爽やかそうな少年“山本武”がそう言った。

それに対し、白い髪で近くに居るだけで燃えてしまいそうな男“笹川了平”が「うむ。極限にそうだな」と頷く。

だが、一番問題なのは周りの方である。

「ランボさん暇だから遊べツナ！」

ツナに飛びかかって来る牛の全身タイツを来た少年“ランボ”。大体が高校生で集められているメンバーの中で唯一の子供である。

「あ、止めろってランボ！」

ツナがランボを引き離そうとする。それに続き、獄寺もランボをツナから引き離そうとした。

「このアホ牛！ 十代目から離れやがれ！」

そうやって騒いでいると、一人の少年が近づいてきた。

「君たち、何騒いでるの？ かみ殺すよ？」

その声にツナと獄寺は振り向く。

そこには風紀の腕章のついた学ランを羽織った男“雲雀恭弥”が自前のトンファーを構えていた。

「だいたい僕は赤ん坊に呼ばれたから来たんだ。こないなら帰らせてもらおうよ」

そう言う雲雀に、遠くから同意の声が聞こえてくる。

「その通りです。僕たちも暇ではないんですから」

雲雀は横目で声の方向を見る。

そこには、先ほどの声の主であり特徴的な髪型と右眼に“六”という数字が刻まれている男“六道骸”と、同じく特徴的な髪型で右眼に眼帯をつけた少女“クローム髑髏”がいた。

ちょうどその時、ツナの頭上に衝撃が走る。空から黒いスーツと黒い帽子をかぶった赤ん坊がツナの頭の上に降りて来たのだ。

「ちやおっス」

「リボーン！ 待たせといて何だよその登場の仕方！」

ツナがツッコむ。それにリボーンはツナの頭から飛び降りて言った。

「悪かったな。準備に手間が掛つてな」

そんなリボーンに雲雀は近づいて行った。

「まあいいよ。それで用つて何？」

今にでも戦闘出来る態勢に入っている雲雀。それもそのはず、雲雀は集まる代わりむれるにリボーンと戦う約束をしているのだ。

「まあ待て雲雀。あとでお前の相手はしてやる。今はそれよりも前にやることがあるぞ。…正一！」

リボーンが叫ぶ。すると一人の眼鏡をかけた少年“入江正一”が一機のバズーカを持って現れた。

「正一くん！」

叫びながら近づくとツナ。だが、ある一点に目が留まり、歩くのをやめる。

「それって！ 十年バズーカ！？」

「なんで入江がそれを！？」

十年バズーカ、それは撃たれた者を五分間だけ十年後の自分と入れ替える、ボヴィーノファミリー秘伝のバズーカである。

だが、何故それを今持ってくるのか。そもそも10年バズーカの所有者はランボである。

「リポーン！ どういう事だよ！」

ツナが叫ぶ。それにリポーンは淡々と答えた。

「いいか？ 今からお前らには十年後に行ってもらおうぞ」

！？

周りの皆の表情が一瞬で変わった。

「なんだよそれ！」

「この10年バズーカはボヴィーノのデータをもとに正一とスパナとジャンニーニが改良したもんでな。五分だけじゃなく長時間10年後の自分と入れ変わる事ができるんだぞ。というわけで、今から10年後に行つて修行だ」

「はあ？」

リポーンのその言葉に呆れるツナ。だが周りの人たちは騒ぎ出す。

「修行か！ 極限に楽しみだ！」

「ランボさん面白いとこ連れっけてくれるの!？」

「はははっ! ま、面白そうだな」

「てめえには負けねえぞ野球バカ！」

それに対し、骸はまるで興味を示さず、クロームは真っ直ぐリボーンを見つめていた。

そして雲雀はトンファーを構えてリボーンに言った。

「そんなことより僕と戦ってよ。赤ん坊」

そんな雲雀に、リボーンはフツと笑って言った。

「俺は強くなったお前と戦いてえんだ。雲雀…」

それを聞いた雲雀は、暫くリボーンを睨みつけ、トンファーを仕舞って引きさがつた。

「その言葉…、忘れないでね」

それからツナ達を見渡した。

「…あと、僕は群れるつもりはないから。全部一人でやらせてもらうよ」

それからリボーンは骸とクロームの方を向いた。

「骸、クローム。お前らはどうするんだ？」

リボーンのその問いに、クロームが答えた。

「私は…行きたい…」

骸はこの答えを予想していたかのように、軽く微笑んで目を閉じていた。

「私…、まだ骸様の力にも…、皆の力にもなれてないから…。強くなりたい…！」

その瞳に映る決意をリボーンは感じ取り、一度頷いた。

そして骸もリボーンに言った。

「クロームが行くなら。僕も行くしかありませんね」

「骸様…」

クロームは骸を見つめる。リボーンはニヤツと微笑んだ。

「それじゃあ10年後に出発するぞ」

リボーンの合図にツナが慌てて反論した。

「ちょっと待てよりボーン！ 向こう言っている間こっちの時代はどうなるんだよ！」

「それは安心しろ。この時間ピッタリに戻してやるぞ」

「でも！」

「つべこべ言わず行けツナ！」

「ちよっ…！」

そしてツナに改良型10年バズーカが放たれる。

それから順に守護者たちにも改良型10バズーカが放たれ、並盛神社に残るのはリボンと正一の二人だけになった。

（頼んだぞ…。未来の事は…）

リボンは空を見上げ、そう思った。

第1話 プロローグ（後書き）

ネタばれかもしれませんが、飛ばされる先は皆バラバラになります。

ちなみに作者が好きなキャラは恭弥様です！（ ）

この世で一番愛しています！ヾ（ ）ー（ ）オイ

あとISで一番好きなのはシャルです！マジかわええ〜！

最後に皆さまこれからもよろしく願いします！（ ）^O^（ ）

第2話 IS学園(前書き)

全員別々に飛ばすといいましたが、それはマフィアの設定的に考えて無理になったので変更しました。

計画性が無さ過ぎる作者ですが、これからもよろしくお願いします

！> (— —) <

第2話 IS学園

IS、通称インフィニット・ストラトス。それは日本で開発されたマルチフォームスーツの名称である。宇宙空間での活動を視野に入れていたが、その圧倒的な性能から軍事目的に開発がすすめられた。現時点ではアラスカ条約により軍事目的が禁止され、競技種目として活用されている。

そのIS操縦者を育成する特殊国立高等学校、IS学園。そのIS学園の職員室に、黒いスーツを着た長い黒髪を後ろで結んでいる女性“織斑千冬”がコーヒーを飲みながら少し考えごとをしていた。

(そろそろあの人がある時間か…)

そして千冬は目を閉じる。その時ほんの少しだけ、常に凜々しさと威厳を保っている彼女の表情が綻びた。最も彼女自身は気付いていないが。

そんな千冬に、緑色のショートカットでメガネをかけた女性“山田真耶”が声をかけた。

「なんだか嬉しそうですね。織斑先生」

不意に声を掛けられ、千冬は驚き、頬をほんのり赤く染めた。

「な、何を…！」

咄嗟に吐いた千冬の言葉に、真耶は笑って答えた。

「そろそろですよ？ 綱吉さんが来るのって…」

その真耶の言葉に千冬は慌てて反論した。

「な、何故あの方が関係あるんですか？ 山田先生」

そんな千冬の反応を見て、真耶は微笑んでいた。

ちょうどその時、千冬の携帯電話が震えだした

ここISS学園の門の前、そこに二人のスーツを着た男性がいた。

一人はまだあどけなさが若干あるが、凛々しく、スラッとした長身で茶髪的美青年。もう一人は大人の魅力を醸し出す、同じく長身で銀髪的美青年。

二人とも見る者を魅了す魅力の持ち主であった。

「十代目。今、織斑千冬に連絡はとりました」

「ありがとう。隼人」

ボンゴレ十代目である沢田綱吉と、その右腕であり護衛である獄寺

隼人だ。

IS学園とは日本からだけではなく他の国から留学してくる人も多い。つまり次世代のIS操縦者を育成する学園であり、その存在は大きい。その存在には裏世界最強の組織であるボンゴレが関わっているほどである。

そのためボンゴレのボスであるツナも、IS学園には時たま足を運んでいる。

だが、二人はこれから先なにが起こるのか全く知らなかった。

ポフンツ！

それからすぐに、奇妙な音が辺りに響いたのである。

突然二人が煙に包まれ、そこから現れたのは幼くなった二人の少年だった。

「いつてえ〜。ここはどこだ？」

「十代目！ ご無事ですか？」

獄寺の声にツナは振り向いた。

「獄寺くん！ …よかった〜、一人じゃなくて…」

十年バズーカは所詮十年後の自分と入れ替わるだけの道具である。行ける場所に選択肢などないため、誰かいる事でツナはひとまず安心した。

「でもここはどこなんでしょう…」

獄寺はその門の先にある大きな建物を見つめ、そう呟く。

ツナも同じ方向を見つめた。

(ここに十年後の俺がいたってことは、あの建物に用があるんだろうな…)

少し不安に思うツナ。十年後はどうなっているかは分からないが、ここがマフィア関係の場所である可能性は十分にある。

ちょうどその時、一人の黒いスーツを纏った女性がこちらに近づいてきた。

獄寺は咄嗟にダイナマイトを、ツナもポケットにしまっただけある死ぬ気丸の入ったケースを掴む。それは二人がその女性がただものではないと理解したからである。

だが、その女性はツナ達を見るや否や、呆気にとられたような、驚いたような顔をする。

ツナと獄寺はその女性に自身達への敵意はないと悟り、ある程度の警戒を解いた。

それからその女性の視線は一点に止まる。それはツナのつけている指輪“大空のリングver・X”だった。

それ凝視し驚いている女性にツナは尋ねた。

「あの…どうかしたんですか…？」

それから女性は獄寺のバックル“嵐のバックルver・X”を一瞥し、顔を上げて言った。

「…どうやら、詳しく話しを聞く必要がありそうだ」

「へっ…？」

ツナが素っ頓狂な声を上げる。それに女性は答えた。

「二人ともついてこい」

二人の男性を連れて歩く織斑千冬。千冬は歩きながらこんがらがった頭を整理していた。

(どうということだ…？)

獄寺の連絡を受け、学園の門のもとまで向かった千冬だが、そこには二人の姿はなく、あったのはその二人を少し幼くしたような少年二人だった。

不思議に思い、二人を観察すると、絶対に他の人間に持つことの許されないものを二人は持っていた。

大空のリングver・Xと嵐のバックルver・Xである。

二人は間違いなく沢田綱吉と獄寺隼人である。だが、なぜ幼くなっているのか、それが分からなかった。

この二人は千冬のこととは知らない。つまり体が幼くなったのではなく、過去の自分と入れ替わったということだろう。だが、そんなものが信じられるはずがない。

千冬は考えるが、答えは出てこなかった。10年バズーカというものを知らないのだから。

(話しを聞かなければ何も始まらないか…)

そして千冬は一つ部屋にたどり着き、三人は中に入った。

そして扉を閉め、それからすぐに千冬は尋ねた。

「まず聞いておきた事があるんだが…。お前たちの名前は沢田綱吉に獄寺隼人か？」

「えっと…、一応そうです」

それにツナは曖昧に言葉を返す。その答えは間違っていないが、この世界の沢田綱吉でも獄寺隼人でもない。そのため曖昧に返す事しかできなかった。

(やはりな…)

千冬は自分の予想が正しかったことを確認し、次の質問をした。

「ならもう一つ。お前たちの姿が幼い理由は何だ？」

その質問にツナと獄寺は動揺する。この女性が一体誰なのか理解できていない。マフィア関係でないなら10年バズーカの事などは口外するわけにはいかない。巻き込むわけにはいかないからだ。

だが、この女性にウソは通じない。超直感がなくても理解できた。そのため、ツナは自身の思いを包み隠さず答えた。

「言えません」

きっぱりと言い放つツナ。それを千冬と獄寺は真っ直ぐ見つめた。

(十代目…)

(やはりあの人と同じだな…)

千冬の頭に浮かびあがったのはこの世界の沢田綱吉。優柔不断な面も只あるが、本気の思いはきっぱりと言い放つ。その瞳に揺れる事のない決意を宿らせて…。

「…分かった。ならこれ以上言及はしないでおこつ」

千冬のその言動に、ツナは呆気にとられる。そして獄寺は千冬に言った。

「お前何企んでやがる」

こんなアツサリと終わる話であるはずがない。獄寺が何かあると疑うのも無理はなかった。

それに対し、千冬は溜息をついて答えた。

「何も企んでない。ただ、それは聞いても答えられないことなんだろう？」

的確に凶星を突く千冬にツナは畏縮し、獄寺は苦虫を噛み潰す。

だが、ツナはその千冬の対応に感謝の念を抱いた。

「ありがとうございます」

そしてツナは頭を下げた。

「十代目！」

頭を下げるツナに獄寺が叫ぶ。それでも頭を下げ続けるツナを見て、獄寺も千冬に頭を下げた。

「…悪かった。疑って…」

昔の獄寺ならこんな行為はしなかっただろう。そこら辺は獄寺も2年の間で成長していた。

それを見た千冬はほんの少しだけ微笑んだ。

それからツナと獄寺は一つの寝室に案内される。

ベッドも二つ用意されており、広さも二人部屋としては十分にあった。

それからツナと獄寺はそれぞれのベッドに腰を下ろした。

「IS学園…ですか…」

獄寺がそう言う。ツナは「はあ」とため息をこぼした。

その後、千冬から色々な話を聞かされた。ISと呼ばれるマルチフォームスーツのこと、自分たち二人がIS学園で保護されることになったこと、そして自分たちのISについての事…。

そしてもう一つ、ツナにとって最大の問題があった。

ツナの傍らに置いてある必読と書かれた分厚い参考書。どう見ても50や100ページの代物ではない。千冬はそれを読めとツナと獄寺に渡してきた。率直に言ってしまうばそんなもの読みたくないし、読んだ所でほとんど理解できない。ツナにはそれが苦痛でしかなかった。

「はあ〜」

再びため息をつくッナ。

これからどうなるんだろう。そして飛ばされた他の壁はどうなっているんだろう。

これでもか、と言うほど悩みの種は尽きなかった。

第2話 IS学園（後書き）

10年後ツナが美形なのは完全に自分設定です

オリ設定が色々追加されています。多分かなりオリ設定は増えると思います。

あと、他のメンバーが合流するのは暫く後になりそうです。

これからもよろしく願いします！（ ）

設定（前書き）

今更ながらの設定です…orz

本当は一番最初に書くべきだったところですが（殴っ！

一部ネタばれにつながるところもありますが、知ったところでどうこうなるわけではないので、気にしないでください。

本当に申し訳ありません m) | | (m すいません

設定

1. ツナ達のISについて

大体察しはついている人はいると思いますが、ツナ達のISはV GがIS化したものです。基本的に性能とか戦闘方法とかもあまり変わりません。ただ、色々とかオリ技とかオリ武装とかあったりするかもしれません。ISは女性しか扱えませんが。ツナ達のISは、ISというよりは改良型VGという形なので扱う事が出来るという設定にしようと思っています。一応ツナの設定とツナのISの設定を書いておこうと思います

沢田綱吉

REBORNの主人公で本作の主人公。高校1年生で15歳。

容姿はカッコいいとは言えないが、可愛く母性本能がくすぐられるようなタイプ。モテそうなイメージであるが、何をやってもダメダメであるため、学校では恋愛相手としては見られず、男女ともにじられる対象になっている。しかし、そういうところが良いと思っている女子もいるため、実は隠れたファンが存在したりする。(注：オリ設定)

大空の翼《アーラ・ディ・シエロ》

設定上では第三世代型のIS。だが基本スペックは他の第三世代を上回る。ただし防御性能は著しく低い。

基本戦闘は従来のツナと同じく、超速度によるX・グローブでの近接格闘戦闘。そのため基本装備は存在しない。

待機形態は大空のリングver.X

2・ヒロインについて

まずはヒロインについてですが、色々考えた挙句シャルちゃんに決定しました。ただ、序盤はもしかしたらツナくんとシャルちゃんが結構フラグ立てるかもしれません（と言っても微ハーレムぐらいですが…）。何かあるかはわかりませんが、最終的にはツナ×シャルを目指したいです。ちなみに作者はシャルロット党です

3・世界観

世界観はIS原作にREBORNの世界観が組み合わさった形です。色々IS関係にボンゴレが関わったりしております。他にも色々な所でボンゴレやボンゴレファミリアが関わっているところがあります。オリ設定も結構あります。あと、オリキャラは出すつもりです。

設定（後書き）

とりあえず色々とキーワードを追加しようと思います！

これからもよろしくお願いします！）（

第3話 1年1組 (前書き)

最近忙しくなってきたので、これから投稿が遅くなっていくかもしれません。

このままいけば他の守護者の登場はいつになることやら...

本当に申し訳ありません。(ノ、ノ)

こんなダメダメなやつですが見捨てないでやってください

第3話 1年1組

IS学園1年1組の教室で、一人の少年が顔を真っ青にして俯いていた。

(これは…想像以上にきつい…)

少年の名前は織斑一夏。織斑千冬の弟であり、この世界で一番最初にISを起動させた少年である。

しかも座席はまん中の一番前、つまりクラス中の生徒の視線は一夏に集まっていた。

居た堪れなくなった一夏は視線を最前列左端に座る黒髪のポニーテールの女性に視線を向けた。

だが、その女性は一夏と視線が合うと、目線を反らしてそっぽを向いた。

(それが久しぶりに会った幼馴染みに対する態度か…？ 篝…)

その女性の名前は篠ノ乃箒。一夏の幼馴染みである。

そして一夏は「はぁ…」とため息をつく。ちょうどその時、教室のドアが開かれた。

(おと…こ…?)

そこに居たのは二人の少年。一人は茶髪であどけない顔つきをした

可愛いという言葉がぴったりの少年であり、もう一人は不良のような風貌をした銀髪美形のかっこいいという言葉がぴったりの少年である。

本来なら女性しか扱えないISの男性操縦者がいきなり二人も現れたのだ、一夏のようにニューースにもなっていない。そのためまわりの女子たちの驚きは尋常ではなく真っ直ぐその二人を見つめていた。だがその静寂の時間も、すぐに歓声へと変わることになった。

『きゃ…きゃああああ！』

「え！？ どういうこと？」

「あの銀髪の人がかっこいい！ なんかクールだし！」

「あの茶髪の子可愛くない!？」

それぞれが各々の感想を述べていた。

そして、一夏はこの二人の少年を見つめながらある違和感を感じていた。

（あれ…俺あの二人…どっかで見たことあるような…）

一夏は思い出そうとするが、何も思い出せなかった。

（気のせい…か…）

一夏はこれ以上深く考えるのをやめた。

それから席に着いたツナと獄寺。ツナは一夏の後ろ姿を見つめた。

（あの人が織斑一夏か…。千冬さんの弟で世界で一番最初にISSを起動させた男…）

ツナがそう思っている時に、緑色のショートヘアで眼鏡をかけた女性が教室に入ってきた。

その女性は教壇に立って言った。

「皆さん入学おめでとう。副担任の山田真耶です！」

元氣よく自己紹介する真耶だが、まわりの生徒たちは反応を示さない。

生徒たちの視線は三人の男性生徒に向けられていた。

（あの人が副担任か…）

ツナと獄寺は千冬にした話と同じ内容を真耶にもしていた。

もしかしたらそこら辺も配慮されてるのかも、そうツナは思った。

「え…、えっと、今日から皆さんはIS学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも放課後でも一緒です。皆さん助け合って楽しい3年間にしましょうね」

だが、やはり生徒たちは無反応。真耶は冷や汗をかき始めた。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。出席番号一番の人からお願いします」

そして出席番号一番の人から自己紹介をし始めた。

(自己紹介か…。はあ…、俺、誇れるところなんて何も無いよ…)
全テストの平均点17.5点、跳び箱は三段まで、逆上がりもできない、何をやっても冴えなくて、ついたあだ名はダメツナ。

リポーンが来てから少しは成長したが、だからと言って誇れるほどではない。

しかもこの教室の生徒は女性だらけ、それが更にツナの鼓動を早くさせた。

ちよつどその時、一夏の自己紹介の番になった。

「はい」

返事をし、一夏は立ち上がった。

「え〜、えっと…、織斑一夏です。よろしくお願いします!」

あんな感じでいいのか、と安心するツナ。だが、その安心感はずぐに打ち砕かれた。

まわりの女子たちは納得していなかったのだ。まるで餌を狩る猫のように眼をきらきらさせていた。

冷や汗をかいて顔を真っ青にする一夏を見て、ツナの緊張も大きくなる。咄嗟に獄寺に視線を向けるが、獄寺はいつも通り机の上で足を汲んで、いつも通りに座っていた。

それから暫くの沈黙。その沈黙の中、一夏は一度深呼吸をして覚悟を決めた。

「以上です！」

まわりの生徒が全員ずっこけた。

「え？ ダメでした？」

（ていうかあの間は何だったんだー！）

自分の事は棚に上げてツナは一夏にツッコんだ。

それから順番が回り、獄寺の自己紹介の番になる。

「次ははや…じゃなくて獄寺くん。お願いします」

真耶の言葉に、獄寺は全く動じずに答えた。

「獄寺隼人」

その対応に真耶は戸惑う。

「あ、あの…獄寺くん…？ 自己紹介は立って…」

「ムリ」

おどおどとする真耶といつも通り傍若無人な獄寺。

それを見ていた女性たちは…

「不良みたい…」

「でも、そついうとこがいい…」

とヒソヒソと言い始める。ツナは呆れてため息をついた。

それからすぐにツナの番になった。

「じゃ、じゃあ。次、沢田くんお願いします」

「は、はい…」

ツナはすぐに立ち上がったが、これといって自己紹介の内容が決まったわけではない。だからと言って一夏のように「以上です」と言うわけにはいかない。

(どろどろ…)

胸の鼓動のスピードが上がる。周りの女子たちの視線が非常に痛か

ったからだ。

「え、えっと、沢田綱吉です！ よろしくお願いしましゅ！」

(やっぱ！ 噛んじゃったー！)

この状況化で最悪の展開。ツナは恥ずかしさのあまり目を閉じる。

その瞬間…

『きゃあああ！ かわいいいいい！』

クラス中から歓声が上がった。

「緊張で噛んじゃったのかな？ 可愛い！」

「なに…？ この母性本能がくすぐられる感じ…」

ツナの顔が恥ずかしさで赤くなっていった。

(やっぱり…。ていうか可愛いって…)

そんな中、真耶は「自己紹介が先に進められないので皆さん、静かに！」と言っているが、まわり女子は聞こえていなかった。

そして、今度は獄寺が立ち上がって叫んだ。

「てめえら！ 十代目に対してなんて事言いやがる！ 十代目は凛々しく、強く、そして優しいお方だ！ それを可愛いなんて」

獄寺がガヤガヤと言いだす。ツナは耳を両手で閉じた。

(頼むからもう終わってくれ！)

それから自己紹介とISの諸説明が終わり、休み時間に入った。

(あゝあ、いきなりやつちやつた！)

落ち込むツナ。そんなツナのもとに一人の少年が近づいてきた。

「よし」

「君は織斑君？」

「一夏でいいぜ。同じ男子だしな」

「うん。なら、俺の事もツナって読んで。皆にはそう呼ばれているから」

「ツナか…。ていうか驚いたよ、まさか俺以外にIS操縦できる男がいたなんて…」

ツナは苦笑いで返す。なんて答えていいか分からなかった。

そして獄寺もこちらに近づいてきた。

「十代目ー！ て、お前は織斑一夏ー！」

そして獄寺はツナの席にたどり着く。

「そついやさ、十代目って何なんだ？」

「あ！ いや！ それは気にしないで！」

「へえ、まあーや」

特に気にした様子のない一夏にツナは安心する。そこへ今度は黒い髪のパニーテールの少女がやってきた。

「一夏、ちょっといいか」

ムスツとした態度のその少女を見てツナは言った。

「一夏の知り合い」

「ああ、篠ノ乃箒って言って俺の幼馴染だよ」

一夏がツナの質問に答える。箒は一夏の腕を掴んで言った。

「悪いが少し借りていくぞ」

そして箒と一夏は教室を後にした。

「何だったんスかね。あの女？」

「さあ？」

そんなこんなで、休み時間を終えたのだった。

第3話 1年1組 (後書き)

今回はセツシーの登場

ですが今回の篝ちゃんの出番が…

そしてセツシーは色々キャラがおかしくなるかも…

ちよろいんですがちよろくないような…、なんか矛盾した感じになると思います(= (。。()

とりあえず自分は皆幸せにしたいと考えています！

第4話 セシリア・オルコット(前書き)

今回セツシー登場

篝ちゃんはお番ないorz

本当にすいません(T-T)

第4話 セシリア・オルコット

そして休み時間を終え、始めての授業に入る。

ちょうどその時、一人の女性が教室に入ってきて。

「な！？ 千冬ねえ！」

一夏が叫ぶ。すると千冬は出席簿で一夏の頭をスパーンと叩いた。

「学校では織斑先生だ」

そんな千冬に真耶が声をかける。

「会議は終えられたんですか？」

「ああ、今回は少し時間が掛ってしまいました…」

それから千冬は生徒たちの方へ向く。

「諸君！ 私が君たちの担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使いものにするのが仕事だ」

その瞬間、周りからまたまた歓声上がる。

『きゃ ああああああああ！』

「千冬様！ 本物の千冬様よ！」

「私！ お姉さまに憧れてこの学園まで来たんです！ 北九州から！」

「私、お姉さまのためなら死ねます」

その反応に千冬は呆れて頭を抱える。

「毎年よくこれだけバカものを集められるものだ。私のクラスに集中させているのか？ 今は授業中だ、静かにしろ」

その言葉で歓声が増すますます大きくなる。

「きゃあああ！ もっと私を叱って罵って！」

「でも時には優しくして！」

そんな中、獄寺は舌打ちをし、呟いた。

「つたく、くだらねえぜ」

千冬が獄寺に視線を向ける。それから獄寺のもとへ歩いていった。

「獄寺、何だその授業態度は？」

「ああ!?!」

スパーン！

千冬が獄寺の頭を出席簿で叩いた。

「てめえ！ 何しやがる！」

「授業中はちゃんと座れ。あと教師への言葉づかいは気をつける」

「ああ!？」

スパーン！

「ちゃんと座れ」

ワナワナと震え始める獄寺。ツナは獄寺がキレかけているのに気付いた。

「獄寺くん、言われた通りに…」

獄寺はツナに視線を向けると、しぶしぶと座り方を変えた。

それからESについての授業が始まる。風貌だけは不良だが、成績はトップクラスである獄寺にとって、それほど難がある授業ではなかったが、ツナと一夏の二人は置いてけぼりをくらっていた。

「では、ここまでで質問がある人？」

その質問にツナと一夏は顔を青くする。真耶は一番前の席である一夏の様子が変なことに気づき、尋ねた。

「織斑くん、何かありますか？」

「え、えっと…」

「質問があつたら聞いてくださいね。何せ私は先生ですから！」

それに一夏は手を挙げて答えた。

「先生…、ほとんど全部分かりません」

「え？ 全部ですか？」

真耶が驚いたような不安になったような声で言う。それから周りの生徒たちに言った。

「今の段階で分からないって言う人どれくらいいますか？」

その質問にたった一人の少年だけが恐る恐る手を挙げていた。

沢田綱吉である。

千冬はため息をついて一夏に近づいて行った。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？ 必読と書いてあつたはずだ」

「いや…、間違えて捨てました」

千冬は一夏の頭を出席簿で叩く。ツナは顔が青ざめてしまった。

「後で再発行してやるから一週間以内で覚えろ。いいな？」

「いや！ 一週間あの厚さは無理です！」

「やれと言っている」

千冬の言葉に一夏は畏縮し「はい…」と答える。それから千冬はツナの方を向いた。

「沢田。お前もこの馬鹿者と同じように捨てた、なんて事はないな？」

「…読んだけど分かりません」

それに千冬はため息をついて言った。

「獄寺。沢田と織斑に教えてやれ」

それに獄寺は舌打ちをし、ボソつと言った。

「なんで十代目はともかく織斑にまで教えなきゃなんねんだよ」

「何か言っただか？」

再びワナワナと震える獄寺。だが今回は何も問題を起こさなかったため、とりあえずツナは安心した。

一時間目が終わり、休み時間。一夏と獄寺はツナの席に集まっていた。

「にしてもすげえな。隼人ってアレ全部覚えただらろ？」

「誰が隼人だ！」

「まあまあ。でもホント獄寺くんって頭良いよね」

「そんな！ 別にたいしたことじゃないっすよ」

そんな会話をする三人。そんな三人に一人の金髪の女性が近づいてきた。

「ちよつとよろしくて？」

「へ？」

「ん？」

「あ？」

その三人の反応に信じられなかったのか、呆れてと驚きが混ざったような声で言った。

「まあ！？ なんですのそのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから。それ相応の態度と言うものがあるのではないかしら？」

そう言う少女。だが三人ともその少女が誰なのか分かっていなかった。ツナと一夏はそれどころではなかったし、獄寺はそもそも覚える気がない。そのため一夏はその少女に言った。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

その言葉にその少女は机をドンと叩いた。

「わたくしを知らない!? セシリア・オルコットを!? イギリスの代表候補生にして入試主席のこのわたくしを!？」

それに対し、一夏が尋ねた。

「一つ聞きたいんだが、代表候補生ってなんだ？」

その言葉に、周りの生徒たちは驚きずっこける。セシリアも信じられないと、驚きと呆れを通り超えて茫然とした。

それから我に返り、セシリアは言った。

「し、信じられませんわ! 日本の男性と言うのはこれほど知識に乏しいものなのかしら!」

それに対し、獄寺が言った。

「十代目、この女ウザいっすね。シメましようか？」

「し、獄寺くん!」

その獄寺の言動に、セシリアの怒りボルテージが一気に上がったのは言うまでもない。

「あ、あなた! 自分が、なな、なんて事を口になっているのか分かっていらっしやるのかしら!？」

セシリアの言葉に、獄寺は立ち上がった

「代表候補生だか何だか知らねえが、てめえみてえな口だけのアホに構ってる時間はねえって意味だ」

セシリアの顔が怒りで紅潮していく。それにツナが勘づき、獄寺の制服の袖を引つ張った。

「獄寺くん。お願いもう止めて」

(これ以上問題起こされたらたまらないよ…)

「…分かりました」

ツナの言葉に、獄寺はしぶしぶ了承して席に着く。だが、セシリアは納得しなかった。

「ちょっとお待ちなさい。あなたが良くてもわたくしの腹の虫がおさまりませんわ」

その言葉に獄寺が再び立ち上がろうとするが、それをツナが抑えた。

「まあ、わたくしは心が広いですから、今ここで自らの非礼を詫びるのなら許してあげないでももなくってよ?」

その言葉に、獄寺はツナの方を振りかえる。

「十代目。やっぱりこの女吹き飛ばしていいツスか?」

(だから獄寺くんー!)

ツナが心の中でツッコむ。

そしてセシリアは机をたたき、身を乗り出した。

「あなた！ まだ言いますの！」

身を乗り出すセシリアを押し返し一夏は言った。

「まあまあ落ち着けて。隼人も言いすぎたんだから謝れよ」

「誰が隼人だ！」

「これが落ちついていられますか！」

ちょうどその時、チャイムが鳴り響く。

「…お話しはまたの機会に。それまでに謝罪文でも考えておくこと
ですわ」

それから授業は終わり、ツナと獄寺は自室に戻っていた。

「よかったー。とりあえずアレから何もなくて…」

それからツナはセシリアのことを思い出す。国家代表候補生については、一応獄寺がツナと一夏に説明した。

「あいつは口だけでたいした事ないツスよ。…それよりも、織斑千冬。あの女、やっぱりただものじゃありません」

「獄寺くん？」

「俺、最初は警戒してませんでしたけど、二回目叩かれた時はそれなりに警戒してました。ですが、避けられなかった」

これまでに幾多の死闘をくぐり抜けてきた獄寺。所詮は出席簿だとはいえ、千冬の凄さを実感するのは容易であった。

(千冬さんって…一体なにもの何だろう…)

そう考えながら、ツナはベッドに横になった。

「これより再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは対抗戦だけでなく、生徒回の会議や委員会の出席など、まあクラス長と考えるもらっていい。自薦他薦は問わない。誰かいないか？」

翌日の一時間目、教壇に立つ千冬がそう言う。それを聞いたツナは嫌な予感に苛まれた。

(まさか……、ないよね……?)

すると一人の女性が手を上げた。

「はい織斑君を推薦します」

「へ!?!」

いきなりの推薦に一夏は驚き間抜けな声を上げる。それに対し、一夏が反論しようとするが、それよりも早く一人の少年が手を上げた。

「ちょっと待て」

その声にツナは目を閉じる。それはツナが最も聞きたくなかった声。ツナは顔の間で両手を組んだ。

「クラス代表ってことはこのクラスのトップってことだ。俺は十代目沢田さんを推薦する」

(やっぱりそうきたー!)

心の中でツナは絶叫する。ちょうどその時、金髪カチューシャの女性が立ち上がった。

「納得いきませんわ! そのような選出は認められません! 男がクラス代表だなんて言い恥さらしですわ! このセシリア・オルコ

ツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

それから一夏を一瞥し、ツナを睨みつける。

「特に、あなたのような人間に務まるわけありません」

「てめえ！」

「類は友を呼ぶと言いますし。あのような野蛮で、落ちこぼれのよ
うな人間を友人にしているようなあなたも、たかが知れてますわ」

セシリアにとっては昨日の件はまだ終わっていない。それが彼女の
言動を辛辣にさせていた。

そして、とうとう獄寺の頭の線が切れ、ダイナマイトを取り出そう
とする。

「ちょっと待って！ 獄寺くん！」

その騒ぎの中、ツナの声が響き渡った。

それからツナはセシリアの前まで歩いていく。

「獄寺くんは俺と違って落ちこぼれじゃないよ。頭も良いし、運動
神経も良い。それに…」

それからツナは一度目を閉じた。

「俺を侮辱するのはいいけど、俺の友達を侮辱することは許さない」

きつぱりと言い放つツナ。そこにはいつもの弱気さは感じられなかった。

「ツナ…」

「十代目…」

二人だけでなく、クラス中の視線がツナにくぎつけとなっていた。

「はつきり言っつて、あなたに代表が務まるとは思えません。女尊男卑の社会だからと言っつて、男性を見下すようなあなたには」

有無を言わせぬ威厳。セシリアはそれを肌で感じていた。だが、セシリアのプライドが、そこから言葉を紡ぎ出した。

「…いいでしょう。そこまで言うなら決闘ですわ!」

「いいよ。そのかわり、俺が勝つたら獄寺くんに謝ってもらっつ」

睨みあう二人。それを見ていた周りざわめき始める。

一夏は『これでいいのか?』と思ひ、千冬の方を向く。

だが、その時の千冬の顔に目が奪われた。普段は凜々しい彼女が、ほんの少しだけにはかんだ笑顔を浮かべていたのだ。

それから千冬は生徒たちに言っつた。

「いいか! 勝負は次の月曜、第3アリーナで行う。沢田とオルコツト、そして勝つた方と織斑が戦つてもらう。それぞれ準備をして

第4話 セシリア・オルコット（後書き）

今回はツナの初陣までかなあ（＾o＾）

とりあえずセッシーには可哀そうですけど…

間違いなくツナ無双になります！（＝）。（）

本当に駄文ですが、これからもよろしくお願いします

第5話 沢田綱吉VSセシリア・オルコット(前書き)

みなさん申し訳ありません！m(´)_(´)m

投稿が遅くなりました！

しかも駄文で内容むちゃくちゃです！ 良いところねえじゃん！

………ごめんなさい

第5話 沢田綱吉VSセシリア・オルコット

代表決定戦の決行が決まった1時間目終了のチャイムが鳴る。チャイムが鳴り終わると、千冬は一度咳払いをして話を進めた。

「織斑、お前のISだが準備まで時間がかかるぞ」

「へ？」

「予備の機体がない。だから学園で専用機を用意するそうだ」

その千冬の説明に周りの生徒たちがざわめきだした。

「専用機？ 一年のこの時期に？」

「つまりそれって政府から支援が出るってこと？」

「すごいなあ、私も早く専用機ほしいなあ」

そんな女生徒たちの中、たった一人の生徒、セシリアだけはあまり反応を見せず、ツナの席に近づいていった。

「一応聞いておきますが…、あなた、専用機はお持ちで？」

「え？ あ、うん」

先ほど見せた威圧感は全く感じられない反応。そもそもツナにとっても、専用機は持っているといえば持っているが、使用経験はほとんどなかった。何せ完成したのが昨日なのだから…

（昨日）

千冬に格納庫のような場所に連れて行かれたツナと獄寺。

それから千冬はさらに奥に進んでいく。

そして奥にあったものを目にした時、ツナと獄寺は絶句した。

「最初の日に説明したとおり、これがこの世界のお前たちが開発していたIS、アキラ・メイ・シエロ・ニホ・メイ・テンベスト大空の翼に嵐の閃光だ」

目の前にあるのは橙色と赤色の二機の機械。足、胴体、腕：etcとパーツの集合体であり、その形状はまるで大きな鎧だった。

「これが…IS…」

ツナが感嘆と呟く。だが、そこには驚嘆だけでなく不安もあった。

普通のISは女性にしか扱えない。つまりツナ達には扱えないということなのだ。

事情が事情であり、ほとんどの情報が非公開な自分たちを保護するには、少なくともそれなりの理由がある。

その理由が男でISを扱えると言う事。それで説得できるほど、こ

の世界におけるISの価値は大きかった。

千冬は二機のISを見つめ、ツナと獄寺に言った。

「正確に言えばISというよりは改良型VGだ。それにまだこいつは不完全…、未完成だ」

「まだできてねえのかよ！」

それに獄寺が不満の声を上げる。千冬は二機のISから目を反らし、ツナと獄寺の方を向く。

「ああ、だが今から完成させる」

「!?!? どういうことですか？」

ツナが尋ねる。すると千冬はツナの指輪を指差し、その後獄寺のバツクルを指差した。

「お前たちのVGとこのISが一つになった時、始めてお前たちのISは完成する」

(ISと…VG)

その時、ツナ達は選択を迫られた。

VG、それは元々はボンゴリングであり、ボンゴレファミリーボスと守護者の証のようなものである。軽はずみな行動はできないのだ。

それはツナも獄寺も分かっている。だが、二人の選択はその逆であった。

「わかりました」

「やってやるぜ」

二人の決断。それは他の誰でもない、この世界の自分たちへの信頼からのものであった。

千冬はそんな二人を見て、フツと笑みをこぼす。

「では始めるぞ。時間がない」

と、昨日の事思い出すツナ。そんなツナに気づかなかったのか気にしなかったのか、セシリアは言った。

「それを聞いて安心しましたわ！ クラス代表の決定戦、まあ、わたくしとあなたでは勝負は見えてますけど、わたくしが専用機、あなたが訓練機ではフェアではありませんものね」

セシリアの言動に何も言い返さないツナ。というより、ツナはセシリアとしゃべりたい気分ではなかった。

「だんまりですか…。ま、良いですけど。せめてわたくしを楽しませてくださいますように…」

そう言い残し、セシリアは自分の席に戻っていった。

その日の夜、自分たちの部屋に戻ってくつろいでいたツナと獄寺。今日もまた色々とあり、昨日と今日とでツナは疲れ切っていた。

「にしてもあの女！ 絶対に許せません！」

そう言いながら、獄寺は自らの掌をパンッと殴る。その怒りはまだおさまっていないかった。

「まあまあ、落ち着いて獄寺くん…、それよりも、一夏は大丈夫なのかな？」

今日の放課後、一夏は箒と特訓していた。

何があつたかはツナ達は知らないが、どうやら箒が一夏にISについて教えてくれるということらしい。その時、一夏はツナ達にも一緒に特訓しないかと誘ってきたが、箒の顔が少し歪み、嫌がっているのに気付いたため、ツナは断る。

さすがにツナも、箒が一夏と二人きりで修行がやりたいと思っている事に気づいたのだ。

それからツナはベッドに横になる。そこで不意に、今の悩みの種である女性の姿が頭の中に浮かんでくる。

（そう言えば、オルコットさんって、何であんなに男を毛嫌いするんだろっ…。この世界が女尊男卑だからかもしれないけど…。なんかそれだけじゃないような気が…）

ボンゴレの血統の人間にのみ宿る力、超直感。それがセシリアに対する違和感に気づいた。

とは言え、それはセシリアに聞かなければ分からない。それと同時に、自分がセシリアについて何も分かっていない事に気づく。

だが、それは今は関係ない。負けられない理由があるのだから。

そしてツナは目を閉じた。

それから時は経ち、代表決定戦開催の月曜日。ツナと獄寺はピット内のモニターで、アリーナの上空を飛んでいる一機のISを見つめていた。

「アレが、オルコットさんのIS…」

「形状を見た感じ…、中・遠距離って感じっスね」

二人がセシリアとそのISを分析している時、こちらに近づいてくる二つの声が耳に入った。

「…なあ筈、ISの事を教えてくれるって話だったよなあ。…でも一周間剣道の稽古しかしてくないか？」

「仕方ないだろ。お前のISはまだ届いていないのだから…」

(一夏と篠ノ乃さんか…、ていうか剣道って…)

一夏はツナと獄寺の存在に気づき、叫んで手を振った。

「お！ ツナ、隼人！ 調子はどうだ？」

「うん。俺は大丈夫だよ」

「っち、何が隼人だ…」

ツナは一夏の言葉に答えるが、獄寺は目を反らし舌打ちをする。それは半ばあきらめたような態度であった。

それからツナは先ほどの話しの事を尋ねる。

「それより一夏は大丈夫なの？ 今剣道の稽古しかしてこなかったって…」

「いや…まあ、…どうだろう」

さすがに不安を隠せない一夏。その時、ピット内に真耶の放送が響いた。

『沢田くん！ 準備をお願いします！』

「あ！ そうだった」

「頑張れよ！ ツナ！」

「十代目！ あんな女コテンパンにしてやってください！」

一夏と獄寺がツナにエールを送る。それにツナは頷き、27と書かれた手袋をつけ、ポケットから小さいケースを取り出した。

そしてツナはそれを二粒出すと、口に含んで飲み込んだ。

その瞬間、ボウ！ツと額に橙色の炎が灯る。さらに、手につけられていた手袋はグローブに姿を変えていた。

「なんだ、それは…？」

箒はその異様な光景に驚きを隠せない。それが当り前の反応ではあるが…。

それに対し、一夏も驚きを隠せなかったが、思考の本質は別所にあった。

(アレ？ この感じ、前にどこかであったような…)

一夏が思い出そうとする中、ツナは右手の中指にはめられている指輪に意識を集中させる。一夏もツナに集中した。

「いくぞナツツ…！
カンビオ・フォルマ
形態変化！」

ツナがそう叫んだ瞬間、指輪が光り始め、ツナの体を包み込む。そして光が消え、そこに立っていたのはIS“アール・テイ・シエロ大空の翼を発動させたツナであった。

「これが、ツナのISか…」

「なんなんだ、このISは…」

二人の反応はまさに逆である。それをわけたのはISに詳しいか否かだ。一夏にとって、ISとはまだ実感の持てないものであり、まだほとんど分かっていない。その反面、ISについて詳しい筈にはそのISの異形が分かっていた。

ツナのISには武装らしきものが見当たらないのだ。ISには武器を量子化させて保存できる特殊なデータ領域があり、操縦者の意志で自由に保存してある武器を呼び出せる、そういうシステムは確かにあるが、それでもここまで何も無いのは量産機並みである。

だが次の瞬間、その驚きは真逆のものに変わる。ツナのISの手の部分、赤みがかかった橙色のグローブに、額の炎と同じ炎が灯されたのである。

「炎がついたぞ！」

一夏の言葉に筭は頷く。そしてツナはピットのカタパルトに向かった。

「行ってくる」

そしてツナはアリーナの空へ飛び立った。

アリーナの空に飛び立ったツナ。ツナはそのまま一直線にセシリアの所まで飛んで行く。

「それがあなたのISかしら？ その炎が何なのかは知りませんが、わたくしとこのブルー・ティアーズの敵じゃありませんわね」

「お前のその傲慢な台詞は聞き飽きた。俺はお前の能書きに付き合うつもりはない」

ツナの言葉にセシリアの頭に血が上る。

「いいでしょう！　そしてお別れですわね！」

セシリアは右手に取りつけられたライフル、スターライトmkII Iをツナに向け放つ。

（レーザー攻撃…、だが…！）

「遅い…」

ツナはそれを静かに回避、それと同時にグローブの炎が大きくなる。

（炎が…大きく…!）

何か来る、セシリアは勘づき、再びライフルでツナを狙い撃とうとする。

ツナはセシリアがこちらに狙いをつけるよりも早く突撃した。

（突撃…!？ しかも武器もなく！ 遠距離射撃型のわたくしに！
？）

「いい度胸ですわね」

セシリアがそう言い、ライフルを放つ。それをツナは見事に避け切り、一気に距離を詰めた。

（避けた…！ それにはや…）

セシリアの思考はそこで止まる。腹部の装甲にツナの拳がぶつかり、セシリアは後ろに吹き飛ばされた。

だが、ツナはそれに追撃をかける。

（調子に乗って…!）

次の拳をセシリアはかわし切り、ライフルでツナを狙おうとするが、もうすでにツナの姿は視界にない。

「こっちだ」

(後ろ…！)

気付いた時にはすでに遅い、ツナの拳で再びセシリアは吹き飛ばされた。

(なんですか…これは…)

そして態勢を立て直し、セシリアはツナを睨む。その一瞬でセシリアは全てを悟った。

(違う…！ アレはあの時の人ではない…！)

瞳の色、雰囲気、口調。目の前にいるツナは今までのツナとはまるで違う。そして何より強いと言う事。これまで見下していたセシリアの表情が真剣なものへと変わった

(あの圧倒的速さ…、おそらく他の機能のほとんどを犠牲にし、スピードを特化させたIS…。それなら武器を使わないのも納得がきますわ)

戦闘方法は格闘だけ、セシリアはその答えに行き着く。

(近づかせたらわたくしにあのスピードはどうしようもない…！
ならば…！)

「ここで一気にとどめを刺さないとは…、甘いですわね！ その甘さを後悔しなさい！」

セシリアのその言葉とともに、四機のビット兵器が出現した。

「行きますわよ…、ブルー・ティアーズ！」

セシリアのビット兵器、ブルー・ティアーズが、空を駆け巡りツナを狙い撃ってくる。

(！？？ これは…！)

一発一発ならば避けるのは造作もない。だが、セシリアはこの四機のブルー・ティアーズを組み合わせて、間をおかずに狙い撃ってくる。

(これがセシリアの本気…、おそらく俺を近づけさせないためか…)
無理やり切りぬけることも可能ではあるが、それはできるだけ避けたい。

その時、ツナはある違和感を感じ取った。それは何故セシリアが動かないかである。

そしてその答えは一目瞭然だった。

(なるほどな…。ビット兵器に意識を集中させているから自身は動けないのか…。ならば…！)

ブルー・ティアーズのをかわしながら、ツナは右腕に炎を集中させる。それにセシリアも気付いた。

(この状況で？ 一体何を！)

「今度はこちらの番だセシリア！」

ツナはブルー・ティアーズの攻撃を避け続けながら、セシリアに右腕を突きだした。

（まさか…！ 遠距離攻撃…！）

「超高速！ Xカノン！」

炎の火柱が、弾丸のようにセシリアに放たれる。

「くっ！」

セシリアはそれを回避。だが、それはビットの制御を止めたといことである。

その隙にツナは一気にセシリアとの間の距離を詰める。だが…。

「かかりましたわ！ ブルー・ティアーズは四機だけではありませんせんのよ！」

そしてセシリアの腰の部分から残り二機のブルー・ティアーズが出現。ミサイルを放つ。

勝った、セシリアは確信する。だが、炎の壁が目の前に出現、ミサイルを飲み込んだ。

（炎の壁！？ こんな事まで出来るのですか…！）

その炎の壁に気を取られ、セシリアの判断が一瞬遅れる。ツナが背後に回り込んでいた。

「しまった…！」

「これで終わりだ！」

セシリアの背後からツナの拳が命中する。そして地面まで吹き飛ばされ、ドゴンツと大きな音がアリーナの中を鳴り響く。

叩き落とされた地面にはクレータが出来ており、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーも0となる。

そしてブーンと試合終了の合図が鳴り、放送が流れた。

『試合終了。勝者、沢田綱吉』

第5話 沢田綱吉VSセシリア・オルコット（後書き）

まず初めに…セツシーごめんなさい！（）（〇殴

そしてオルコツ党の皆さまも！

さらに次回は、いつちーの出番です！白式の出番です！

できるだけ一夏くんは活躍させたいと思っています またまたツナ
無双になるかも…（）（〇殴

更新遅いバカな自分ですが、これからもよろしくお願いします！（

^O^v

第6話 沢田綱吉VS織斑一夏(前書き)

みなさん申し訳ありません！m(´|´)m

今回すごくグダグダです(´〇〃殴っ！

ただでさえ駄文なのにいいいいー！？(´。´)ガーン

第6話 沢田綱吉VS織斑一夏

『試合終了。勝者、沢田綱吉』

その放送が流れた瞬間、観客席から歓声がわき起こる。

『きゃあああああ！』

「すごい！ ツナくんが勝った！」

「しかも代表候補生を一方的に…」

その中には素直な賛美もあれば、少し畏縮した人もいる。誰が見ても明らか、一方的な実力差があったからだ。

観客の歓声を身に受けるツナ。勝敗は決したが、まだハイパー死ぬ気モードは解いていない。

ツナはセシリアが墜落した場所にゆっくりと降りる。そこにはシルドエネルギーが切れ、呆然とするセシリアがいた。

「セシリア…」

その声にセシリアは目を会わせずに答えた。

「なんですか？ 笑いにでも？」

セシリアは今ツナと会話はしたくなかった。何せアレだけの啖呵を切り、自分自身が見下してきた存在に、言い訳のしようがないほど

の大敗を決してしまったのだ。プライドはボロボロである。

「悔しいか…？」

セシリアは答えない。が、凶星であることは誰が見ても明らかである。

「世界は広い、お前より強い奴なんて何人もいる」

「……そんな話をしに来たのですか？」

「いや、それだけじゃない。もう一つお前に伝えておきたいことがある」

「伝えておきたいこと？」

セシリアは尋ね返す。その反応にツナは頷いて答えた。

「女尊男卑…、何故お前がそこまでそれにこだわっているかは知らない。だが、それはただの枠でしかない。確かにそんな言葉の枠で捉えられれば簡単だ。男性だから女性に劣っている、そう決めつければいいだけなのだから。だが、それでは見えないものもたくさんある」

（見えないもの…）

セシリアの脳裏をよぎったのは先ほどのツナの言葉であった。

『世界は広い、お前より強い奴なんて何人もいる』

確かにそうだ。今日の前にしている人間は自分よりも遙かに強い。それは実力云々だけでなく心でもある。しかもその人間は自分が見下していた男性。

男性だから必ずしも女性に劣っているわけではない、セシリアはそれに気付いた。

それからセシリアの顔が晴れて行くのが分かる。何かにつつ切れたように。

(勝てるはずありませんわ。こんな人に…)

そしてセシリアはツナに言った。

「完敗ですわね」

同時刻のモニター室、二人の戦いを観戦していた二人の女性、織斑千冬と山田真耶がそこにいた。

「やっぱり…、さすがですわねツナさん。リミッター付きのISで代表候補生のオルコットさんを圧倒するなんて…」

「ああ、何せ戦闘経験が違う。確かにIS操縦者としてはまだ素人だ。だが、あのISは元々はV.G。それにあの人が戦ってきたのは命がけの世界だ。背負う覚悟がまるで違う。今のオルコットが相手になるはずがない」

千冬の言葉は正しかった。

ISには絶対防御と呼ばれる操縦者の死亡を防ぐ能力が備わっている。だがマフィアの世界にそんなものがあるはずがない。一瞬の油断で自分だけでなく仲間も死ぬことになることもある。ツナとセシリアの試合結果は当然と言えるものなのだ。ISの経験不足を補って余りある戦闘経験と実力、そして覚悟を持ち合わせているのだから…。

それからビットに戻って来たツナ。それを一番に出迎えてきたのは一夏と獄寺だった。

「さすがです！ 十代目！」

「ていうかツナってむちゃくちゃ強かったんだな…」

それに対し、篝は佇んで三人を見つめていた。

強すぎる、第一印象はそれだ。機体スペックも操縦者であるツナ自身も、想像の遥か上を行っていた。

いくら専用機持ちとはいえ、普段のツナを見ていれば強いとはとても思えないのも無理はない。

(一夏…)

これから一夏はツナと戦う事になる。

一夏はそれを分かっているのだろうか？無邪気に笑っている一夏をみて篤はそう思った。

篤がそんな考えごとをしている時、真耶の放送が辺りに響く。

『織斑君！ 来ました！ 織斑君の専用IS！』

『織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。ぶつつけ本番でものにしろ』

そして現れるのは、白に近い灰色のISであった。

「これが俺のIS……」

呟く一夏に、ツナが言った。

「先に待っているぞ。一夏」

「ああ」

そしてツナは再びアリーナの空に向かった。

それからIS“白式”を装着した一夏。そこで自身のISの武装に

対して衝撃を受けることになる。

（なんなんだ…？ 武器が刀一本って…）

そして、箒は一夏の傍に近づく。

「一夏、その、何と言つか…」

かける言葉が見つからず、箒はしどろもどろになる。先ほどの戦闘を目の当たりにして頑張れと軽はずみな事は言えなかった。

そんな箒に一夏は言った。

「箒。俺さ、さっきの戦い見て、絶対にツナには勝てないって、そう思った。俺でも分かったよ、ツナの実力ぐらい。でも、諦めてはねえよ」

「一夏…」

箒はまだ何を伝えればいいのかわかっていない。ただ伝えたい事を、それが軽率であっても言わなければならぬ事を一夏に言った。

「勝つてこい！ 一夏！」

「…ああ！」

そして一夏もアリーナの空へと飛び立った。

「待たせたな。ツナ」

「別にかまわない」

アリーナーの上空で対峙する二人。ツナはグローブに炎を灯し、一夏は一本の刀を手に握る。

(刀か…)

剣道しかしてこなかったためその武器を選んだのか、何か特別な機能があるのか、はたまたそれしか武装がないのか。考えても始まらない、ツナは理解し、グローブの炎を強くする。

「行くぞ一夏！」

「こい！ ツナ！」

ツナは一気に距離を詰める。特別な機能があるかもしれないと、様子見で距離を取る事も考えられたが、何せツナにはダメなしで使える遠距離攻撃がないし、一夏のISの性能も分かっていない。一気に距離を縮められれば様子見のために距離を取った意味がないし、最悪完全に裏目にでる。

それから拳で白式の腹部装甲に殴りかかる。一夏はツナから距離を取り、それを回避し突撃した。

「甘いな」

ツナは高速移動で背後に回り込む。そして背後から裏拳を背中にぶ

つける。

吹き飛ばされるが、一夏は何とか粘り、地面スレスレから上空に飛びあがった。

「まだまだだぜ。ツナ！」

「ああ、さすがだ」

再び高速移動、ツナが一夏の背後に回り込む。だが…

「二度も同じ手が喰らうかよ！」

一夏は振り向きざまに刀でツナをなぎ払う。ツナはそれを後ろの飛んで回避。そこに一夏は追撃をかける。

「いくぜ！ 今度はこっちの番だ！」

だが、戦闘経験の差、それがここで出てきた。ツナは後ろに飛んだ時からこうなる事は予測の範囲内であった。そのため、ツナは片手の炎のみの推進力で回避、もう片方の手には炎を集中させていたのだ。

それに気づかず、一夏は刀を振り上げる。その瞬間、ツナは片手を突きだした。

（やば…！ これあの時の…！）

「X・カノン！」

頭が反応しても体が動かない。ツナのグローブから放たれる火柱に一夏は直撃した。

だが、まだ勝負はついていない。その炎と煙が晴れ、そこにいたのは先ほどまでとは見た目が違うISを装着している一夏。その色も灰色から白色に変わっていた。

《フォーマット・フィッティング終了》

目の前に現れたその文字に戸惑う一夏。それに対し、ツナは冷静にそれを分析する。

(ファースト・シフト…だったか…)

獄寺に教えてもらった教本に書いていた事柄。つまりそれは、やっとなと白式が一夏専用のISとなった事を意味する。

「よく分からないが。これでやっとこの機体は俺専用になったらしいな」

そして一夏は自身の武器も変化している事に気づく。

(雪片弐型？ 雪片つて…)

雪片、それはかつて一夏の姉、千冬が使用した武器であった。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

そして刀からエネルギーの刃が現れる。

(これで無様には負けられなくなった…)

「こっからが本番だぜ！ ツナ！」

「ああ、お前の全てをぶつけてこい！」

そして一夏はツナに突撃する。

(さっきよりも機動力は遥かに上か…、だが…！ まだこちらの方が上だ！)

ツナは回避し、拳を振るう。それを一夏は雪片式型の刀身で受け止めようとす。その瞬間、ツナの超直感が違和感を感じ、攻撃を止めて後ろに下がる。

(あの武器に、触れるのはマズいな)

このISが政府の援助のもとで完成した事、ツナの頭にそれが過った。

そんなISのたった一つの武装である刀。それがただの刀であるはずがない。もしかすれば一夏が刀しか使用していないという可能性もあるが、その可能性は低いだろう。

(どうするか…)

あの刀に触れるのは避けたいが、真っ向から挑んでそんなことができるほど甘くはない。

だからと言って遠距離攻撃は危険すぎる。先ほどの白式とは性能が

違いすぎるからだ。先ほどのように片腕だけの炎の推進力ではかわしきれない可能性がある。

(考えても無駄だな…)

そう思い、ツナは一夏の背後に回り込む。一夏はそれに合わせて反応、ツナと向き合う。だが、ツナはもうすぐ近くまで近づいてきていた。

(くっ！ やっぱりはえー！)

一夏は距離を取って刀を振り下ろす。ツナはそれを回避し、再び背後に回り込んだ。

一夏も体を反転し、ツナと対峙しようとするが、それよりも早くツナの拳が反転しようとする一夏の腹部の装甲に直撃する。

ツナの戦闘方法、それは速さによる翻弄だった。ツナの速度を見切れる人間なんて一握りしかない。初心者の一夏にその速度に対応するすべはなかった。

そして一夏は成すすべもなくツナの攻撃に直撃する。

(やばい…！ このままじゃ…！)

シールドエネルギーは残り僅か、このままでは負けてしまう。

やっぱり強い、戦う前から分かっていた事だが、一夏は再度そう思う。だが同時に、このままでは終われない、そう一夏は思った。

そして出した答え、それは玉砕覚悟の戦法。

一夏はツナと向き合った。

(来い！ ツナ！)

ツナの超直感が何かを感じる。一夏は何かを企んでいる、ツナはその思ったが、拳を止めなかった。

この拳を止めてはいけない、そうツナの超直感が反応したからだ。そして直撃するツナの拳。刹那、一夏はツナのグローブを力強く掴んだ。

(死ぬ気でやれば、腕一本止めることぐらい…！)

その時、一夏の耳にツナの声が届いた。

「さすがだ、一夏…！ だが…！」

そして一夏が刀を振り下ろす前に、ツナのグローブから火柱が出現する。

X・カノン、ツナは一夏に突撃する際、すでにそのグローブに炎をためていたのだ。

そしてX・カノンの火柱は一夏に直撃。同時に試合終了のブザーが鳴った。

『試合終了、勝者沢田綱吉』

それからピット内に戻ったツナと一夏。ツナはすでにハイパー死ぬ気モードを解いており、いつもの状態であった。

「あゝあ、完敗だよツナ。やっぱり強いな…」

「いや、一夏も凄いや。アレが始めてだったなんて…」

ツナのそれは心から思ったことである。そして、一夏は強くなる、そうツナは思っていた。

「十代目！」

「一夏」

そんな二人の傍に獄寺と篁が駆け寄る。

「十代目！ ご苦労様です！」

「一夏、その、負けはしたが、始めてとは思えない戦いだつたぞ。獄寺がツナに、篁が一夏にそれぞれそう言う。

「いや、ご苦労様とかそんなじゃ…」

「ありがとな。篁」

そしてツナと一夏がそう答える。その時だ。

「沢田くん、織斑くん、お疲れ様です」

ツナと一夏に向かつて呼びかけられる声、四人はその声の方向に視線を向ける。そこにいたのは真耶と千冬だった。

「織斑先生に山田先生？ 一体どうしたんですか？」

「いえ、色々と説明しておかなければならない事がありました」

ツナの問いに真耶が答える。そして千冬が説明を始めた。

「いいか織斑、今からお前のIS、白式について説明する。一度しか言わないからよく聞いておけよ……。まずは……」

そして千冬は一夏に白式の説明をし始めた。そしてそれが終わり、ツナ達はアリーナをあとにする。こうして今日一日は幕を閉じた。

第6話 沢田綱吉VS織斑一夏（後書き）

グダグダで申し訳ありません！m（――）m

戦闘もむちゃくちゃです。やっぱり描写は難しいです（――）――

――）

そしていまだにヒロインのシャルちゃんすら登場していない状態（

（〇＝殴っ！

本当に投稿遅くて申し訳ありません！m（――）――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3518w/>

IS<インフィニット・ストラトス> ~pride of the sky~

2011年10月14日23時54分発行